
伝説を砕く者

エディルン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伝説を砕く者

【Nコード】

N5229R

【作者名】

エディルン

【あらすじ】

双月の光が失われるとき、星々は光を失い、世界は純粹なる闇と化す。

すべての光が世界より失われ、やがて化の世界より降り来る者あり。

その者、名を有することなし。
世界に滅びの時を招きいれん。

伝説を砕く者

その世界には伝説が存在した。

「双月の光が失われるとき、星々は光を失い、世界は純粹なる闇と化す。

すべての光が世界より失われ、やがて化の世界より降り来る者あり。

その者、名を有することなし。

「世界に滅びの時を招きいれん」

伝承が語るかのように、その日は頭上に輝く二つの月の一つが色を失った。

世界の夜をやさしく照らし出していた月の輝きが失われた夜。異世界の地の王が現れた。その王は、凶暴な魔族たちを引き連れ、魔族は世界に住む人々つを次々に襲っていった。

異界の魔族の突然の出現に、各国は抵抗を試みたが、それも無限の数の如く湧き上がる魔族を撃退するまでには至らなかつた。

人間たちの勢力は瞬く間に滅ぼされていき、もはや世界は魔族の手に落ちようとしていた。

だが、そんなときに立ち上がった者たちがいる。

伝説に記されている光る剣を手にした勇者。

彼と、その仲間たちは、魔族の軍勢を次々に打ち払い、絶望に落とされていた人々を救いだしていった。

やがて勇者の一行は、異界の王である魔族の城にまで到達した。

そして、異界の魔族の王と勇者の決戦が行われた。

王たる玉座に腰を据えた異界の王は、その前に立ちふさがる勇者たちを前にして一步として引くことがなかった。

いや、異界の王たるものは、その力を持って光の剣を持つ勇者たちを完膚なきまでに叩き伏せ、その圧倒的な力にもはや勇者たちはなすすべもなくなろうとしていた。

「ククク、脆いものだ。所詮人間の力などこの程度のもの」「グッ」

圧倒的な實力を持つ魔王は余裕綽々の態度。それに対して、片膝をついて荒い息を上げる勇者は苦い声を出すのみ。

仲間である者たちは傍に倒れ伏し、もはや勝負の行方も知れていった。

「分かったであろう人間。

我は異界の王たる者。

これまでに七つの世界を滅ぼしてきた我にすれば、このような世界を制することなど造作もないことなのだ」

余裕を持つ魔王は、もはや勇者との戦いには決着がついたと確信していた。あとは、適当に興が赴くままに、目の前にいる人間に、自らの圧倒的な力を見せつけてやるだけ。

そう考えていた。

そんな魔王の心に沿うかのように、世界は暗い闇に包まれていく。この世界に光輝く、二つの月の色が失せていき、星々の光までもが消え去っていく。

「どうだ、人間よ。

世界が完全なる闇に包まれていく。

まるで

、私の勝利を前に、この世界が恐怖しているようではないか。

クハハハハ」

愉悦に浸る魔王は、世界から色を失われていく光景を見て喝采す

るかのように笑った。

やがて頭上に輝く二つの月が完全に色を失い、星々までもが光を失った。雲が出ているわけでもないのに、世界からは完全に光が消え去り、完全なる闇が世界へと到来した。

その光景に、だがこれまで余裕な態度をすぐさなかった魔王が初めて戸惑いを見せた。

「・・・なんだ！これは！」

そう口にする。

次の瞬間、色の失われていた世界に色が戻った。

二つの月が光を取り戻し、星々が再び頭上に色を取り戻す。

ただし、魔王と勇者がいたその場に、それまではいなかった者がいた。

「貴様、いつからそこにいた！」

新たなる闖入者に気づいた魔王が、問う。ただしその声には落ち着いた様子がなかった。

「・・・」

「私の問いに答えるよ、人間！」

「なるほど、俺を人間と思うか？」

闖入者は、魔王にそう答えた。

「・・・」

それに対して魔王は無言だった。

魔王が焦った理由は、目の前に現れた闖入者の正体が知れなかったからだ。自らの魔王たる力をもつてすれば、どのような存在であれ、傍にいれば感知することができる。魔王の力たる魔力は、魔王の周囲にあふれかえり、魔力の中に入った存在を知ることができるからだ。

だが、その魔王の魔力の範囲の中にいながら、その闖入者の存在を感知することができないのだ。

そう、気配が全くしない。

そんな存在に出会ったのは、魔王にしてもこれが初めてのことだった。

「七つの世界を滅ぼした魔王ドルフィルガ。覚えておくといい、俺の名はグランガレア」

「グランガレア？」

「こつても呼ばれている、『伝説を砕く者』と」

「なっ・・・」

次の瞬間、勇者相手に圧倒していた魔王に突然闇が動いた。闇はまるで風のように魔王に吹きつけた。闇が魔王を包み込み、そして流れ去るようにして消え去った。

だが、闇が消えるとともに、その場にいた強大な力を持つ魔王の姿までもが消え去っていた。

「一体何が？」

そのあまりにも突然の光景に、片膝をついていた勇者が問う。

だが、その質問に対して、グランガレアと名乗った男は無関心だった。

「ガーランド」

かわりに、グランガレアスがそう口にする。突然グランガレアスの背後に男が現れた。

「かたはついた、あとはお前たちがこの世界を制せよ」

「御意に」

次の瞬間、グランガレアスの背後から、まるで世界に穴が空いたかのように黒い巨大な穴が出現した。そこからおびただしい数の魔族が次々と現れ、空に飛び立っていった。

「この世界の勇者よ聞くがよい。

この世界は、俺がもらった」

そういい、グランガレアスは勇者の前より姿を消した。

「なに！」

ガッ！」

グランガレアスの宣言に勇者は反駁しようとしたが、その胸元を

一筋の剣が貫いていた。

グランアガレスの背後にいた男が手にする剣が、勇者の胸を貫いていたのだ。

「所詮、人間などたわいもない」

男が剣から手を離すと、勇者はぐったりと力なくその場に横たわってしまった。

この日、異界の魔王と勇者の一行が相次いで死亡した。

かわりに、光なき夜に訪れたグランガレアスと名乗る者が、世界を征服した。まはや希望であった勇者を失った人間に望みはなかった。そして、魔王を頂点にいたっていた魔族たちも、新たに現れたグランガレアス配下の魔族の前に、あっけないほど簡単に蹴散らされ滅ぼされていった。

世界が征服されるまでに、わずかひと月の歳月をも要しなかった。

（後書き）

あとがき

ども、エディルンです。

ゲーム制作をしている人間ですが、最近小説を書きたくてうずうずしている今日この頃。

本当は長編を書きたいところですが、時間がなかったので、手抜きな感じで短編小説を作ってしまった。本当はこの後の展開もできているのですが、それはまた時間がある時にということで。

と言いつつ、時間があるころには、また別の話を作っているかもしれないですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5229r/>

伝説を砕く者

2011年3月10日21時25分発行